

## 2026\_0511「夜の県道、ニホンジカの群れ」日々の理科 4292号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

夜の北軽井沢、県道54号線を車で走っていると、突然、ヘッドランプの光の先に4~5頭の若いニホンジカの群れが浮かび上がりました。闇の中で白く際立つ尾の裏が印象的で、驚いたようにこちらを見つめながらも、すぐには森へ跳び去らず、しばらく路肩にたたずんでいます。

おそらく前年の初夏に生まれ、初めての冬を越した1歳前後の若い個体たちでしょう。ニホンジカは秋に発情期を迎え、10月頃には雄が角をぶつけ合い、翌年の5~7月に母ジカが通常1頭の子を産みます。初夏の子ジカは白い斑点を持ち、草むらに身を伏せて育ち、秋には群れに加わり、翌春にはこの写真のような若い群れとなって新緑の高原を動き始めます。

北軽井沢では近年、このニホンジカの増加が著しく、夜間はもちろん、昼間でも道路脇や牧草地でその姿を見ることが珍しくなくなりました。かつては「出会えば特別」だった存在が、今ではほぼ毎日見かける高原の日常になりつつあります。

一方で、同じ大型哺乳類であるツキノワグマの出没は、この地域では意外なほど少なく、少なくとも話題に上る機会はまれです。森の主役がクマではなくシカへと静かに移りつつあることを、この夜の小さな遭遇は物語っていました。浅間山麓の生態系は今、確かに変化しています。

(2026年5月上旬／北軽井沢)

